

子どもにとっての「ジェンダーの二分法」

—幼児を対象にしたインタビューの分析—

藤田 由美子

Structure of Children's Attitudes toward "Dichotomy of Gender" :
The Analysis of Interviews for Preschool Children

FUJITA, Yumiko

Abstract

The purpose of this article is to examine the structure of children's attitudes toward the "dichotomy of gender" through interviews with preschool children. Data was collected during July and August 2006. A total of 67 children in the Kyushu and Chugoku districts responded to the interview. Questions were about their preference of clothing (shorts and skirt), colors (red, blue, green, pink), toys (car, a stuffed animal, blocks, and play house items), characters (*Hello Kitty*, *GoGo Sentai Boukenger*, *Futari wa Pretty Cure*, and *Pikachu*); their attitudes toward play activities (playing jump rope, playing soccer, playing *untei*, a horizontal ladder, and playing house), and asking them which gender these things were appropriate for.

The findings are as follows: Firstly, the children's preferences with clothing, colors, toys and characters were differentiated according to their gender, and they took them for granted. Secondly, these children thought that three of the play activities were gender differentiated: playing soccer and playing *untei* are for boys and playing house is for girls. Thirdly, some children could cross the gender border, with variation of preferences. I discuss these results in terms of gender construction during early childhood.

Key words : preschool children, dichotomy of gender, interview, gender construction

キーワード : 就学前児, ジェンダーの二分法, インタビュー, ジェンダー構築

2008.11.26受理

問題設定

本稿の目的は、子どもの「ジェンダー」構築について、幼児へのインタビュー結果を手がかりに検討し、幼児期におけるジェンダー形成研究への示唆を得ることである。

従来、ジェンダーをめぐる子どもの意識については、発達心理学を基盤に、性自認や性役割意識などの発達に注目した研究が多く行われてきた (Slaby and Frey

1975, Taylor and Carter 1987など)。近年では、従来の研究において自明とされてきた「発達」「社会化」を相対化し、子どもたちが他者との相互作用のなかで社会の構築に加担し、構築されたものを主体的に行使する、という視点に立つ研究が行われている (河出 1993, Thorne 1993, Corsaro 2005, Yelland 1998)。

筆者はこれまで、幼稚園・保育園での観察調査を通して、園生活における子どもたちのジェンダー構築を明らかにすることを試みてきた。一連の研究を通して、子

もたちは、園生活において、「ジェンダー」に関する一定の観念を構築しそれを応用する、という知見を得た(藤田 2004, 2005)。

果たして、子どもたちは、ジェンダー構築をどのように捉えるのか。本稿では、子どもの語りにあらわれた「ジェンダーの二分法」について、幼児を対象にしたインタビューを手がかりに検討する。

本稿では、子どもたちの考えを探るための手がかりとして、彼らを対象にしたインタビューの回答にあらわれた子どもたちの語りに注目する。子ども自身による服装や遊び等の選好についての語りを通して、彼らのジェンダーをめぐる解釈を検討し、幼児期におけるジェンダー構築の一側面を明らかにすることを目指す。その作業を通して、「ジェンダーと教育」の問題について考える手がかりを提供したい。

子どもの語りへの注目

言語におけるジェンダーに関する研究は、約30年の間に、言語と性差研究から構築主義的アプローチへと展開を遂げた(湯川 1997)。子どもに関しても、この20年ほどの間に、子どもたちの言語使用は彼らの社会的活動と関連し、彼らの主観的世界の表明である、というように、子ども自身による言語を通しての社会構築が注目されるようになってきた。

社会言語学の分野では、たとえば、子どもたちのごっこ遊びにおける葛藤の分析(Sheldon 1990)など、子ども自身の社会的活動との関連で彼らの語りに注目したものがみられる。また、近年、幼児教育研究では、参与観察などによる質的研究として、子ども自身の語りに注目した研究(Hatch 1995など)、フェミニストポスト構造主義にもとづく子どものジェンダー構築に関する研究(Davies 2003, Blaise 2005)が行われている。

子どもたちのジェンダーに関する語りは、われわれの社会に流布するジェンダー・ディスコースと関連する。彼らの語りは、自身による社会的世界の解釈の表明であると同時に、社会的世界の構築の実践である。

本稿では、これらを踏まえた上で、子どもたちの語りを、インタビューを通して析出することを試みる。その際、構造的なインタビューを行い、刺激絵を用いる。

刺激絵を用いる方法は、従来の発達研究における実験研究と類似している(Albers 1998など)。しかし、本調査において、刺激絵は、子どもの語りを引き出すための道具として位置づけられる。

調査の概要

子どもを対象にしたインタビューは、2006年7月~同8月に、中国地方の中都市住宅地に立地する学校法人立幼稚園(以下A園)、九州地方の中都市住宅地に立地する社会福祉法人立保育園(以下B園・C園とする)⁽¹⁾の各園に在園する3-5歳児253名(A園86名、B園101名、C園66名)のうち、あらかじめ文書により保護者の同意を得ることができた者67名(A園28名、B園30名、C園9名)を対象に実施した⁽²⁾。

質問項目は、①ジェンダーに関する認識、②服装とジェンダーの適合性、③遊びの選好、④玩具の選好、⑤色彩の選好、⑥キャラクターの選好、である。調査協力園および保護者の協力を得るため、短時間での回答時間が可能になるよう、調査項目を構造的に設定した。また、同じ理由により、各質問について、選択肢を絵や写真(以下、刺激絵とする)で示した。刺激絵は、計30枚作成し、1枚ずつあるいは4枚分同時に、プレゼンテーションソフトを用い、ノートパソコンのディスプレイで子どもに示された。例として、2枚の刺激絵を下図に示した。

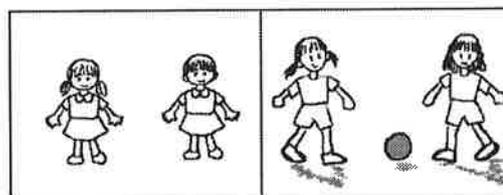


図 刺激絵の例

遊び活動に関する質問をする際、次のように刺激絵を示した。遊びをしている子どもの絵を示してその選好を尋ねるときには、回答者と同じ性別の外見を持つ子どもの絵を示した。たとえば、女の子には、女の子が縄跳びをしている絵、女の子が「うんてい」をしている絵、などを示し、男の子には、男の子がそれらの活動をしている絵を示した。一方、どちらの性別にふさわしい活動であるかを尋ねる場合には、どの活動についても、女の子が行っている絵を左に、男の子が行っている絵を右に配置して示した。

記録にあたっては、園および保護者の承諾を得た上で、インタビュー記録用紙、ICレコーダーおよびデジタルビデオカメラを使用した。ICレコーダーは、音声をとらえるために、また、デジタルビデオカメラは、子どもたちの表情やしぐさなど、筆者との非言語的コミュニケーションをとらえるために使用した。会話は、ICレコ

ーダーの音声録音をもとに逐語録化した。

本調査において、子どもたちの語りを十分に引き出せたとは必ずしも言い切れない。しかし、少なくとも、言語的・非言語的な語りを引き出すための「刺激」としての機能は果たしていたと考えられる。

以下、分析結果を述べるにあたり、逐語録の一部を資料として提示する。各逐語録に登場する子どもは、個人名が知られないための配慮として、すべて仮名とした。

「ジェンダー化」された子どもの語り

1. 服装と「ジェンダーの二分法」

服装の好みについて、線描きの子ども服2種類（短パン、スカート）の絵を示して尋ねた。その結果、女の子は、96.8%がスカートを好む一方、58.1%が短パンを好まない。男の子については、86.1%は短パンを好む一方、57.1%がスカートを好まない。スカートと短パンでどちらが好きか選択させた結果、女の子の90.3%がスカートを、男の子の83.3%が短パンを好んだ。

子どもたちは、園内での生活では短パンをはくことが多い。女の子は、スカートを好む者が9割強であったのに対し、短パンを好まない者は過半数に達した。女の子については、観察された園内での服装⁽³⁾とは異なり、ジェンダー化された好みがある傾向にあるといえる。

「女の子の短パン」については、男の子の方が違和感を表明する割合が高い。「女の子が短パンをはいている」絵について尋ねた結果、実際の園内での遊び着や体操服

が短パンであるにもかかわらず、「似合う」と答えた割合が女の子では83.3%に達したのに対し、男の子の過半数は「似合わない」と回答した。

「男の子のスカート」には違和感を示す子どもは、性別を問わず多い。「男の子がスカートをはいている」様子については、女の子も男の子も過半数が「似合わない」と答えた。

インタビューでの会話より、子どもたちは、自分が属する性別の服と考えられているかどうかによって、服装の好みを判断していると考えられる。資料1のコウジとの会話を見てみよう。

まず、コウジは、「女やから」「恥ずかしい」のでスカートををはきたくない、と語っている。続いて、「短パンをはいた女の子」と「短パンをはいた男の子」の絵を示されたとき、彼は短パンをはいた女の子について「似合わない」と回答した後「女の子はズボンやないから」と語る。「スカートををはいた女の子」と「スカートををはいた男の子」の絵を同時に示されたとき、「女の子」については「女の子だから」似合う、「男の子」については、「男はスカートはかん」から似合わない、と語っている。

彼は、「男の子がスカートををはくこと」に対する態度を問う二つの刺激絵については、どちらに対しても「恥ずかしい」と語る。「恥ずかしい」ということばより、男の子がスカートををはくことについての彼の強いタブー意識が推測される⁽⁴⁾。

2. 玩具・色彩・キャラクターの好み

まず、玩具4種類（車、ぬいぐるみ、ブロック、まま

資料1 服装の好みと着用

<p>コウジ B園 3歳10ヶ月</p> <p>I: じゃあ 次の質問に移ります コウジさんはこの洋服好きですか コウジさん好きですか 好き? ほんと この洋服着たいと思う?</p> <p>C: <u>女やから</u></p> <p>I: <u>女やから着たいと思わん? ほんと</u></p> <p>C: <u>嫌です 恥ずかしい</u></p> <p>I: 恥ずかしい? この洋服は着たいと思う? ほんと? 好きですか?</p> <p>C: 好き</p> <p>I: あ ほんと? じゃあ左のお洋服と右のお洋服どっちを着たいと思う? これ? 右側のお洋服ねー どうして どうして着たいかな?</p> <p>C: 分からん</p> <p>I: 分からん ほんと? じゃあ コウジさん聞いてください お友達と同じ形のお洋服を着てます 左のお友達はこの洋服は似合うと思いますか?</p> <p>C: 似合わん</p> <p>I: 似合わん? どうして</p> <p>C: <u>あーね 女の子はズボンやないから</u></p> <p>I: あーほんと?</p> <p>C: <u>スカート</u></p> <p>I: じゃあ 右のお友達は どうですか</p>	<p>C: いいと</p> <p>I: いいとおもう? じゃあこの洋服 同じ洋服着てるね 左のお友達は似合うと思いますか?</p> <p>C: 似合う</p> <p>I: 似合う? どうして</p> <p>C: <u>だって女の子やっちゃかい</u></p> <p>I: じゃあ右のお友達は どうですか 似合うと思いますか?</p> <p>C: 似合わん</p> <p>I: 似合わん? ほんと どうして</p> <p>C: <u>だって男はスカートはかんもん</u></p> <p>I: ほんと</p> <p>C: <u>恥ずかしい 恥ずかしい</u></p> <p>注1 以下の会話例では I: 調査者 (報告者) C: 子どもを指す 注2 会話中の記号は次のとおり () 聴き取りできなかった箇所 [] 動作等の記述 注3 子どもの年齢は 2006年4月1日現在</p>
--	--

資料2 玩具・色彩・キャラクターの好み

<p>シンジ C園 5歳11ヶ月</p> <p>I:じゃあこの4つの色のうち どれかひとつを選んでついでにわいたら この中 [シンジ ディスプレーを押そうとする] 押さないでね</p> <p>C: [赤を指差す]</p> <p>I:ここね この色ね うん</p> <p>C: 0</p> <p>I: どうしてこの色を選んだかな</p> <p>C: <u>赤が強いから</u></p> <p>キョウコ C園 4歳8ヶ月</p> <p>I:じゃあこの4つの中ではどれが一番好きですか</p> <p>C: <u>プリキュア</u></p> <p>I:これ プリキュアが一番好き</p> <p>C: [うなづく]</p> <p>I: プリキュアはテレビでいつも見てる</p> <p>C: [うなづく]</p> <p>I: 本当</p> <p>C: <u>ボウケンジャーも</u></p> <p>I: あボウケン ボウケンジャーも見るとね でもプリキュアが好きなのはどうしてかな どうしてプリキュアが好きですか</p>	<p>C: <u>かわいいけん</u> (以下略)</p> <p>ユウスケ A園 5歳9ヶ月</p> <p>I: [4色を同時に示す] 4つの中でどれが一番好きですか</p> <p>C: これ [青を指差す]</p> <p>I: これが好き どうしてこの色が一番好きですか</p> <p>C: <u>お父さんが好きだから</u></p> <p>I: あっ 本当 お父さんがこの色が好きなんだ [中略: キャラクターの選好に関する質問]</p> <p>I: じゃあ 4つの中でどれが一番好きですか</p> <p>C: これ [ピカチュウを指す]</p> <p>I: これが好き 本当 どうしてこのマンガが一番好き?</p> <p>C: <u>だってかわいいから</u></p> <p>I: <u>かわいいから好きなのね</u> [ボウケンジャーを指す] このマンガはどうして好きじゃない?</p> <p>C: <u>ちょっとはかっこいいけど なんか...</u></p> <p>I: <u>なんか好きじゃない</u> 本当 [プリキュアを指して] じゃあどうしてこのマンガは嫌い?</p> <p>C: <u>女の子だから</u> (以下略)</p>
--	---

ごとセット)のそれぞれについて、好き嫌いを尋ねた。その結果、車は男の子の91.4%に好まれ、ぬいぐるみは女の子の90.3%に好まれた。

4つの色(赤, 青, 緑, 桃)のうち、もっとも好きな色を選択してもらった結果、女の子にも男の子にも、赤色が比較的多く好まれていた。女の子の45.2%が桃色を、29.0%が赤色を好んだ。青色を好む女の子も22.6%いた。男の子の38.9%は青色を、27.8%は赤色を好んだ⁵⁾。

4種類のキャラクター(ハローキティ, プリキュア, ボウケンジャー, ピカチュウ⁶⁾)のうち好きなものを尋ねたところ、女の子の87.1%はハローキティを、90.3%はプリキュアを好んだ一方で、45.2%はボウケンジャーを「嫌い」と答えた。男の子の97.2%はボウケンジャーを、97.1%はピカチュウを好んだ一方、57.1%がプリキュアを「嫌い」と答え、52.8%がハローキティを「嫌い」と答えた。

色彩やキャラクターの選好は、「ジェンダーの二分法」に依拠していることが推測される。資料2に登場するシンジは、赤色を好む理由として「強いから」と語った⁷⁾。

子どもたちが語るキャラクター選好の理由として、「かわいい」「強い」「かっこいい」といったことばがしばしば聞かれた。資料2のキョウコのように、多くの女の子はプリキュアについて「かわいい」と言い、ボウケンジャーを好む男の子の多くは、そのキャラクターにつ

いて「かっこいい」と語った。ここでも、自分の性別と同じかどうかについての言及がみられる。ユウスケは、プリキュアを嫌いな理由として、「女の子だから」と語った。

一部の子どもたちは、大人やきょうだい・仲間が好むことを理由とした。ユウスケは、青色をもっとも好む理由として父親が好きであることに言及していた。

3. 「ジェンダー化された」活動 — 活動性と家庭性

子どもたちは、さまざまな遊び活動についてどのように解釈するのか。それを明らかにするために、「なわとび」「ボール蹴り」「『うんてい』遊び」「ままごと遊び」の4つの活動を選び、その選好についてたずねた。

調査では、子どもたちに、「なわとびをする一人の子ども」「ボールを蹴る2人の子ども」「『うんてい』で遊ぶ一人の子ども」「ままごと遊びをする2人の子ども」の4枚の絵を示し、それぞれについて、その遊びをするか、その遊びは好きかについて尋ねた。さらに、それぞれの遊びを行っている女の子と男の子(短パン着用)の絵を示し、彼らとその遊びをしてもよいか尋ねた。

以下、ジェンダーに関する語りが明確に見られた「ボール蹴り」「ままごと遊び」「『うんてい』遊び」の3種類について、分析結果を述べる。

(1) 「ボール蹴り」

「ボール蹴り」は、とりわけ男の子に好まれている。

彼らの94.4%は、「ボール蹴り」をしており、97.2%が好きであると回答した。同じ問いを女の子に行ったところ、実際に遊ぶ者や好む者の割合は6割を越えるものの、彼女たちの35.5%は嫌いと回答した。

この遊びを行っている子どもの絵に関する判断をしてもらったところ、多くの子どもたちが「男のすること」と認識しているようであった。女の子がこの遊びをしている絵について、彼女がこの遊びをしてもいいと思わないと回答した子どもの割合は、全体で約1/4であり、とくに男の子では1/3に達した。

この選択について、子どもたちの語りを詳しく分析した。資料3に、その一部を示した。「ボール蹴り」または「サッカー」について、「男のすること」あるいは「女はしない」ものである、と述べる子どもたちは、性別を問わずみられた。たとえばマキは、「女の子はあまりサッカーすきじゃないから」と語っていた。

なお、A園での調査では、サッカーのワールドカップ直後に実施されたこともあり、ワールドカップのテレビ中継への言及がみられた。タロウは、テレビ番組でサッカーを「女はやってない」ために、女はサッカーをしてはいけない、と語った。

(2) 「ままごと遊び」

「ままごと遊び」について尋ねたところ、女の子の80.6%、男の子の66.7%が遊んでいると回答した。一方、この遊びを好むかどうか尋ねたところ、女の子は全員がこの遊びを好きであると回答したのに対し、男の子では約1/4がそれを好まないと回答した。

「ままごと遊び」をする子どもについて、性別ごとに遊んでいいかどうか尋ねた結果、女の子についても男の子についても、「遊んでいい」と答えた子どもは多かった。ただし、男の子がこの遊びを行うことを「よくない」と考える子どもの割合は、女の子の19.4%、男の子の14.7%であった。これらの子どもたちは、ままごと遊びは「女の子の遊び」と考えていることがうかがえた。資料4に登場するマミとヨシアキは、ともに、「ままごと」遊びが女の遊びであることを理由に、男の子がその遊びを「(あまり)してはいけない」と語っていた。

(3) 「うんてい」

各園の子どもたちは、園生活での運動遊びや自由遊び、または公園その他での遊びを通して、「うんてい」に親しんでいるようであった。ただし、実際に遊んでいる子どもは、女の子よりも男の子に多い傾向にあった。「うんてい」で遊ぶと回答した割合は、男の子では79.4%にのぼるのに対し、女の子では48.4%に過ぎない。また、この遊びが好きと回答した割合は、男の子では

90.6%であったのに対し、女の子では72.0%にとどまった。

この遊びについては、自分の生物学的性と異なる子どもがその遊びをしているところを「よくない」と回答する割合が、それぞれ約20%いた。とりわけ、女の子が「うんてい」遊びをしている絵に対しては、「よい」と答える男の子の割合は、女の子に比べて少なかった。

A園とB園の子どもたちの中には、この遊びを(高いところにぶらさがるために)「危ない」あるいは「注意を要する」遊びであると認識している者がいた。それゆえ、一部の子どもたちは、女の子がこの遊びをしてもいいとは思わない」と回答していた。資料5左段のリョウスケは、女の子は「怪我するから」この遊びをしてはいけない、と語った。

一方、男の子については、その「危ない」遊びも許容される。資料5右段のタロウは、男の子は「男じゃけえ(=だから)落ちて大丈夫」と語った。

このような回答の傾向、「うんてい」遊びの適切性をめぐる解釈より、子どもたちは、女性は弱い、男性は強い、というジェンダー特性に関する観念を有し、それを解釈に適用していることがうかがえる。

「ジェンダーの二分法」の越境をめぐる語り

インタビューの結果より、子どもたちは、服装、玩具、キャラクター、遊び活動について「ジェンダーの二分法」に準拠して解釈していることがうかがえた。

一方で、子どもたちは必ずしも「二分法」とらわれていない側面もある。何人かの子どもたちは必ずしも「ジェンダーの二分法」とらわれない選択をしていた。また何人かの子どもたちは、両者の間を行き来しているように思われた。以下、事例を示しつつ述べる。

1. 「ジェンダーの二分法」からの自由

先に述べたように、「ままごと遊び」については、「女の子の遊び」と捉える子どもが多く、また、「ボール蹴り」「うんてい」については、「男の子の遊び」と答える子どもが多かった。その一方で、これらの遊び活動について、

「女の子・男の子どちらもその遊びをしてもよい」と考える子どもたちが何人かいた。観察調査時、C園では、園内に備え付けられている「うんてい」遊びをみんなで行っている光景がみられた。資料6のうち、C園の5歳児クラスに在籍しているタツヤの会話をみてみよう。彼は、会話の後半部分で、園内の活動でみんな一緒に行っている活動である「うんてい」を、女の子・男の子のどちら

資料3 「ボール蹴り」についての会話

<p>マキ A園 5歳6ヶ月</p> <p>I: じゃあねマキちゃんこの遊びは好きですか これなんの遊びしていると こだか分かる C: サッカー I: ああ サッカーだねうん サッカーはしますか C: [首をふる] I: しない 好きですか C: <u>嫌い</u> I: 嫌い ほんとあまり好きじゃない C: [うなづく] I: ほんと じゃあね 左のお友達と右のお友達がサッカーをしています 左のお友達はサッカーをしても良いと思いますか C: <u>思わん</u> I: 思わん どうして思わないのかな C: <u>女の子はあまりサッカー好きじゃないから</u> I: ほんと 右のお友達はこの遊びしても良いと思いますか C: 思う</p>	<p>I: ほんと どうしてかな C: <u>男の子はね サッカーがね 好きじゃけん</u></p> <p>タロウ A園 4歳11ヶ月</p> <p>I: 公園でよくする 好きですか C: [うなづく] I: サッカー好き C: [うなづく] I: じゃあ左のお友達と右のお友達がサッカーしてるね 左のお友達から見 てみよう 左のお友達はサッカーをしても良いと思いますか C: <u>思わん</u> I: 思わない 右のお友達はサッカーしても良いと思いますか C: 思う I: 思う じゃあどうして左のお友達はサッカーしてはいけないと思いま すか C: <u>うん うん だってね サッカー テレビでサッカーしてるときにね 女は やってないけえ</u></p>
---	---

資料4 「ままごと」遊びについての会話

<p>マミ B園 5歳4ヶ月</p> <p>I: [ままごと遊びをしている女の子と男の子の絵を示して] じゃあ 左の お友達はこの遊びをしても良いと思いますか 右のお友達はこの遊びを しても良いと思いますか C: あんまり I: あんまり C: [うなづく] I: ほんと どうしてかな? C: 0 じゃないから I: うん? C: <u>女の子じゃないから</u></p> <p>ヨシアキ A園 5歳3ヶ月</p> <p>I: [ままごと遊びをする男の子の絵を示しながら] <u>食事</u> ままごと遊びだ</p>	<p>ね ご飯作りごっこしてるね この遊びはよくしますか C: <u>しません</u> I: しない この遊びは好きですか C: 好きじゃない I: 好きじゃない C: [うなづく] I: じゃあ [ままごとをする女の子と男の子の絵を示して] この遊びを している2人のお友達がいます 左のお友達はこの遊びもしても良いと 思いますか C: してもいい I: 右のお友達はこの遊びもしても良いと思いますか C: <u>してはいけない</u> I: してはいけない? いけない? 本当 どうしてしてはいけないの? C: <u>男だから</u></p>
--	--

資料5 「うんてい」遊びについての会話

<p>リョウスケ B園 5歳9ヶ月</p> <p>I: じゃあ 左のお友達はこの遊びをしても良いと思いますか C: 0 [首をふる] I: 右のお友達はこのあそびをしても良いとおもいますか C: 0 [うなづく] I: どうして左のお友達はこのあそびをしては 0 C: <u>怪我するから</u> I: 怪我するからか</p>	<p>タロウ A園 (前出)</p> <p>I: どうして左のお友達はこの遊びをしてはいけないと思えますか C: <u>落ちるけえ</u> I: 落ちるけえ 落ちるけえ C: [うなづく] I: 右のお友達は落ちないのかな C: <u>男じゃけえ落ちて大丈夫じゃけえ</u> I: あ 男じゃけえ 落ちて大丈夫なのね C: うん</p>
---	---

もしてよいと語った。また、資料6右段のチヅルは、「男の子の遊び」と多くの子どもたちに考えられていた「ボール蹴り」について、年上のきょうだい（女性と男性）と一緒にしたエピソードを語った上で、女の子も男

の子もこの遊びをしてもいい、と語った。

一方、「二分法」とらわれる部分ととらわれない部分の並存もみられた。タツヤは、「うんてい」についての語りとは異なり、「ボール蹴り」を「男の遊び」と捉

え、女の子はその遊びをしては「だめ」と語った。

これらを見ると、二分法にとらわれない回答の背景には、その活動が回答した子どもの生活のなかで、「子どもの性を問わずに」行われていることが考えられる。おそらく、タツヤにとっては、「ボール蹴り」はともかく、「うんてい」はいつも「みんなしよる」遊びである。また、チヅルにとっては、「ボール蹴り」は年上のきょうだいとしているため、自分にとって身近な遊びである。子どもたちの普段の活動の中で行っている遊びであるかどうかは認識の違いに影響を及ぼしている可能性がある。

2. 「ジェンダーの二分法」への「修正」

最後に、「ジェンダーの二分法」から自由な語りの途中で、それを修正したアユミの語りをとりあげる。アユミは、当時A園の4歳児クラスに在籍していた女の子である。資料7には、遊び活動に関する質問のうち、「ボール蹴り」をしている2人の子どもの絵を見せたところから始まる一連の会話の逐語録を示した。

アユミは、ボール蹴りについて、「大人になって・・・サッカー選手になりたい」と語り始める。彼

女は、その願いを七夕の短冊に書いた、と語る。その後、ワールドカップの決勝戦での選手の退場シーンをテレビで母親と見たことについて語る。

ところが、筆者が「ボールを蹴っている女の子」の絵を見せて「このお友達はサッカーをしてもいいと思う」と尋ねた時、「でも男の人しかやらんけ、やっぱこっちしかダメ」と言う。筆者がその回答について彼女に確認したところ、男性しかテレビに出なかったことを繰り返す。

一連の語りにおいて、アユミは、「サッカー」を「ジェンダー」といかに関連づけているのか。会話の前半部分、彼女は、サッカー選手になりたいという願いを書いたこと、家族とともにサッカーのワールドカップのテレビ中継を見たことを語った。「サッカー」に関してはジェンダーの二分法にとらわれていなかったといえよう。

しかし、彼女は、テレビ中継の話をするうち、テレビに登場するサッカー選手が男性ばかりであることを思い出した。テレビ情報におけるサッカー選手の性別など、メディア情報を参照し、彼女は考えを「修正」した。

彼女の「修正」には、筆者との相互作用も関連すると

資料6 「二分法」にとらわれない語り

<p>タツヤ C園 5歳6ヶ月</p> <p>〔「ボール蹴り」をする女の子と男の子の絵を示しつつ〕</p> <p>I: お外でよくする</p> <p>C: [うなづく]</p> <p>I: 本当 じゃあ左のお友達と右のお友達 同じように 同じ遊びをしているけれど 左のお友達は<u>この遊びをしていい</u>と思いますか</p> <p>C: <u>だめ</u></p> <p>I: えっ 何で 何で駄目なの</p> <p>C: <u>女の子だから</u></p> <p>I: 女の子だから駄目なのか じゃあ 右の ちょっと待ってね え この右のお友達は<u>どう</u>思いますか</p> <p>C: いいと思う</p> <p>I: いいと思う どうして</p> <p>C: <u>男だから</u></p> <p>I: ああ 本当</p> <p>C: [うなづく]</p> <p>I: うん うん わかりました じゃあ この [「うんてい」をしている男の子の絵を示す] <u>これ</u> どういう遊びしてる所だからわかる</p> <p>C: お外</p> <p>I: お外 ほら屋上にあるでしょ こういうおもちゃが あ こういうおっきなのが</p> <p>C: うん</p> <p>I: うんていっていいいます</p> <p>C: ああ うんてい</p> <p>I: うん うんてい うんていはよくしますか</p> <p>C: する する する</p> <p>I: 本当 好きですか</p> <p>C: 好き</p> <p>I: 本当 え 屋上 屋上とかでよくしてる</p>	<p>C: する</p> <p>I: 本当</p> <p>C: 時々してる</p> <p>I: 時々してる あ 本当 うん [「うんてい」をしている女の子と男の子の絵を示す] じゃあ左のお友達と右のお友達 え 同じ遊びをしています 左のお友達は<u>こういう遊びをしていい</u>と思いますか</p> <p>C: いい</p> <p>I: 右のお友達は<u>どう</u>ですか</p> <p>C: いい</p> <p>I: 本当</p> <p>C: <u>どっちともいい</u></p> <p>I: どっちともいいんやね</p> <p>C: <u>だって屋上でみんなしよるもん</u></p> <p>I: みんなしよるもんね うん</p> <p>チヅル A園 5歳0ヶ月</p> <p>I: うん ボールで遊んでるね これ<u>け</u>って遊ぶやつ こういう遊びはよくしますか</p> <p>C: はい</p> <p>I: どういうところですか</p> <p>C: <u>昨日運動場でしよった お兄ちゃんとお姉ちゃんと</u></p> <p>I: うーん 本当 お兄ちゃんとお姉ちゃんとするんだ この遊びは好き?</p> <p>C: 0 [うなづく]</p> <p>I: じゃあ同じ遊びをしている2人のお友達がいます</p> <p>I: <u>左のお友達はこの遊びをしてもいい</u>と思いますか</p> <p>C: はい</p> <p>I: <u>右のお友達はこの遊びをしてもいい</u>と思いますか</p> <p>C: はい</p>
--	---

資料7 「二分法」にとらわれない語りとその修正

<p>アユミ A園 4歳9ヶ月</p> <p>I: じゃあ これはねサッカーをしているところです アユミちゃんはサッカーはしますか</p> <p>C: <u>大人になってサッカー選手になる になりたいです てね 笹の葉にね 紙に描いて笹の葉に飾った</u></p> <p>I: あー 本当 サッカー選手になりたいって 短冊に書いた</p> <p>C: [うなづく]</p> <p>I: 本当 良かったね じゃあサッカーは好き</p> <p>C: 0 [うなづく]</p> <p>I: あ 本当</p> <p>C: やおいボールしかね</p> <p>I: うん</p> <p>C: <u>やおいボールしか好きじゃない サッカーするとき</u></p> <p>I: 本当 うん</p> <p>C: 大人になっても ね あのね こうやってね足蹴られたりするんだって 硬い靴で</p> <p>I: うん 硬い靴で蹴られるね うんうん</p> <p>C: <u>やおいボールしか嫌</u></p> <p>I: うん</p> <p>C: それにね胸ね頭でパーンってされたらもううれくなる</p> <p>I: [笑って] そうじゃねおったね そういう胸ねパーンってね 頭で胸をゴーンってした人がおったね</p>	<p>C: それ見た</p> <p>I: 見た</p> <p>C: お母さんと</p> <p>I: あ お母さんと見たんだ びっくりした</p> <p>C: 0</p> <p>I: ふーん 本当 ふうん そうなんだ</p> <p>C: あのね こうやって人が言いよった サッカー選手って頭って で胸をターンってしたらもううれなくなりましたって</p> <p>I: うん そうだね 出られなくなってたね うん 言ってたねー</p> <p>C: でも外国人だった</p> <p>I: うん そうだった 外国人だったね うん じゃあサッカーをしているお友達の話です これ別の絵だと思ってね このお友達はサッカーをしても良いと思う</p> <p>C: うん</p> <p>I: ん じゃあこのお友達はサッカーしてもいいと思う?</p> <p>C: <u>でも男の人しかやらんげやばこっちはダメ</u></p> <p>I: え 本当 男しかやらない サッカーは</p> <p>C: うん</p> <p>I: 本当</p> <p>C: あのね <u>男しかね サッカー選手出でなかった</u></p> <p>I: あ 本当 男しか出でなかったね そういえばそうだね うん</p> <p>C: うん <u>じゃけんね 男しかやりよらん</u></p>
--	--

考えられる。彼女の回答への反応や意図せぬ表情の変化などは、彼女の語りへの筆者の特別な興味を示すことになっただろう。それらは、彼女に自分の回答が「イレギュラー」であることを悟らせた可能性は否定できない。

考察および結論

1. 考察

本稿で明らかにした点は、次の三点である。第一に、服装や玩具等の選好において、多くの子どもたちは自らのジェンダーに適していると考えられている選択を行っていた。第二に、彼らは、遊び活動についての語りにおいて、同様に選択を行っていた。第三に、彼らの一部は、「ジェンダー」にとらわれない選好を行っていた。これらの結果について、考察を行う。

第一に、常識知としてのジェンダーについてである。本稿で得られた分析結果は、「男の子のもの」「女の子のもの」という考えが、多くの子どもたちによって共有されていることを示唆する。その考えは、一種の「常識」として言及されていた。

この「常識」としてのジェンダー知は、「ジェンダー」という二元論的で非対称的なシステムが強固であることを示している。われわれは、言語を用いて、人間を「対」としての「女」か「男」のいずれか一方に配分しようと

する。この点は、先行研究の知見とも対応している (Davies 2003)。

ジェンダー知は、どのようにして子どもたちにもたらされるのか。子どもたちは、大人や仲間集団とのかかわり、マス・メディアでのスポーツの取り扱いに言及していた。したがって、彼らは、他者をはじめさまざまな事物を通して「ジェンダーの二分法」に関するメッセージを獲得していると考えられる。

第二に、子どもたち自身のジェンダー構築についてである。子どもたちは、語りの中で、「女だから」「男だから」などのように、刺激絵の内容についてジェンダー・カテゴリーを用いて分類していた。彼らは、外界からの「ジェンダーの二分法」に関するメッセージを受動的に受け止めるだけではなく、主体的に、ジェンダー知を活用して、生活世界を解釈することもできると考えられる。

子どもたちの一部は、「ジェンダーの二分法」にとらわれない語りをしていた。彼らは、たとえばC園での「うんてい」のように園の保育活動で「ジェンダーの二分法」にとらわれないもの、生活経験を通して知った服装・玩具や活動等に関する多様性を選択していると考えられる。

一般に、子どもたちは、大人の価値観を受動的に教え込まれる存在として捉えられがちである。しかし、子どもたちは、受動的に大人の価値を内面化するばかりでは

ない。先行研究において、子どもたちは、大人たちや仲間集団とのかかわりを通して、社会的世界の構築に寄与する、という知見が示されていた。本稿で行ったインタビューの分析を通して、彼らは、単なる客体としてではなく、自ら主体として「ジェンダーの二分法」について解釈し、ジェンダー構築を行うことがうかがえた。

一方、子どもたちの回答は、質問を行った筆者との相互作用の結果あらわれてきた可能性があることにも留意する必要がある。資料7のアユミは、相互作用の途中で自分の見解を「修正」していた。彼女は、筆者との相互作用の中で、「テレビ情報」を思い出し、それを参照することによって考えを修正した可能性がある。

2. 結論

本稿では、幼児を対象にしたインタビューの語りを分析することにより、子どもたちによる「ジェンダーの二分法」の解釈および応用の一端を明らかにした。

本研究を通して、先行研究で言及された子どもたちの「主体性」を、子どもたち自身の語りを通して再確認することができた。インタビューにおいて、回答者である子どもたちは、質問者である筆者が顕在的にも潜在的にも提示したジェンダー・メッセージを受信する存在であると同時に、筆者との交渉を通して自らのジェンダー概念を構築し表明することができる存在でもあった。

本稿の知見は、幼児期のジェンダー形成研究に示唆をもたらす。本稿の締めくくりとして、二点述べる。

第一に、子どもへのさらなる接近の必要性である。大人と子どもは、非対称な関係性 (Yelland 1998) にあるため、大人が「子どもの世界」、あるいは「子どもの文化」に接近することは困難である。本稿においても、調査者が大人であることにより子どもへの接近がかならずしも成功したとはいえない。とはいえ、子どもの世界に可能な限り接近することにより、幼児期のジェンダー形成の複雑な様相を明らかにする試みは必要であると思われる。これには、子どもの語り、表現の分析等、さまざまな方法論が考えられるだろう。

第二に、幼児を対象にした調査における、共同解釈への視座である。本稿において、調査者は価値中立的な存在ではなく、自らも「二分法的なジェンダー」を表象し言明する存在であった。したがって、子どもを対象にしたインタビューについても、調査者は、単なる中立的な質問者ではなく、回答者の「一定の解釈」を引き出す可能性があることを踏まえ、分析・考察する必要がある。

ただし、本調査では、子どもの語りに費やされる時間が限られており、十分な語りを得ることができなかった。

今後は、自由インタビューの機会を設けるなど、調査方法のさらなる工夫が必要であると考えられる。

謝辞

本稿は、平成17-19年度科学研究費補助金若手研究(B)「子ども期における『身体』のジェンダー化に関する実証的研究」(課題番号17710212)の成果報告の一部である。調査にご協力いただいた各園の教職員・保護者の皆様、そして子どもたちに心より御礼申し上げます。

注

(1) A園では、1998年9月～1999年3月、2000年11月～2001年11月、2005年9月～2006年3月に観察調査を行い、B園およびC園では、2000年7月～2001年3月、2006年1月～3月に観察調査を行った。

(2) 調査の承諾は得られたが調査当日欠席した2名(A園、B園各1名)を除く。なお、C園については、園の意向により、5歳児のみを対象に協力依頼を行った。

(3) 観察調査時には、すべての園で、女の子たちはパンツを着用していた。

(4) 「男の子がスカートをはいている」様子に対する違和感は、女の子によっても語られていた。

(5) 1998年度の観察調査時、しばしば「赤は女の色」「青は男の色」という発言がみられた。しかし、本調査では、子どもたちの色彩選好はより多様化している。

(6) 「プリキュア」は、「ふたりはプリキュア スプラッシュスター」、「ボウケンジャー」は「轟轟戦隊ボウケンジャー」のことである。また「ピカチュウ」は「ポケットモンスター」の主要キャラクターである。

(7) ヒーロー番組を好む子どもたちにとって、赤色は、「(戦隊ヒーローの)リーダーの色」と捉えられていた。

引用・参考文献

- Albers, Susan M 1998, "The Effect of Gender-Typed Clothing on Children's Social Judgements," *Child Study Journal*, 28(2), pp. 137-155.
- Blaise, Mindy 2005, *Playing it Straight: Uncovering Gender Discourses in the Early Childhood Classroom*, Routledge.
- Corsaro, William A. 2005, *The Sociology of Childhood*, Second Edition, Pine Forge.
- Davies, Bronwyn 2003, *Frogs and Snails and Feminist*

Tales: Preschool Children and Gender (Revised Edition), Hampton Press.

藤田由美子 2004, 「幼児期における『ジェンダー形成』再考 —相互作用場面にみる権力関係の分析より—」『教育社会学研究』第74集, pp.329-348。

藤田由美子 2005, 「幼児期におけるジェンダー形成と子ども文化」望月重信・近藤弘・森繁男・春日清孝編『教育とジェンダー形成 —葛藤／錯綜／主体性—』ハーベスト社, pp.47-71。

Hatch, J. Amos (ed.) 1995, *Qualitative Research in Early Childhood Settings*, Praeger.

Maccoby, E. E and C. N. Jacklin 1974, *The Psychology of Sex Differences*, Stanford University Press.

Sheldon, Amy 1990, "Pickle Fights: Gendered Talk in Preschool Disputes." *Discourse Processes*, 13, pp.5-31.

Taylor, Ronald D. and Carter, D. Bruce 1987, "The Association between Children's Gender Understanding, Sex-Role Knowledge, and Sex-Role Preferences," *Child Study Journal*, 17(3), pp. 185-196.

Yelland, Nicola. 1998, *Gender in Early Childhood*, Routledge.

湯川純幸 1997, 「言語とジェンダー研究の新たな地平 —ジェンダー化された自己と権力関係の構築の実践を見る—」『富山大学人文学部紀要』第26号, pp.1-30。